

シンポジウムの報告

はるひ野町内会エコプラザ対策部会

7月28日（土）に多摩市主催環境シンポジウム「生活環境とリスクプラスチックと化学物質について」が開催され、化学物質のリスクや廃プラ圧縮に関する専門家の講演や議論を聞く貴重な機会となりました。

基調講演、各パネリストの発表および討議を通じて、廃プラ圧縮によって発生する化学物質のリスクへの対処方法、必要な安全対策等につき、専門家の間でも意見がわかれ、合意できなかったとの印象を受けました。

当部会では、多摩市議会に提出した陳情書でも明らかにしているとおおり、安全性が確認されるまで施設を稼働しないことを求めています。専門家の話を聞いたうえでも、廃プラスチック圧縮によるリスクについて「安全性が確認された」との結論は得られなかったと考えています。

このため、当部会では今後も引き続き、多摩市に対してより詳細な説明を求め、稼働の停止を含めた必要な要望を提出していきます。

シンポジウムの内容について、以下に簡単に報告いたします。

【講演要旨】

○安井至氏（国際連合大学副学長）

＜基調講演・パネルディスカッションのコーディネーター＞

- ・リスク＝有害性×曝露量と評価ができる。これに各自の不安係数をかけて考えてみてほしい。ただし、不安係数を大きく考えるほど、そのリスクに対処するにはコストがかかるという現実がある。
- ・リスクがゼロの社会はありえない。リスクの大きいものから優先的に取り組み、社会全体のリスクを低減していくことが重要である。
- ・日本では、1970年代頃から公害問題が多発し、リスクが大きな社会だったが、行政が概ね適切に対処してきたので、現在ではリスクがほとんどない社会となっている。
- ・ローカル・リスクに過剰に対応することによって、地球温暖化などグローバル・リスクが高まる。

＜以下パネリスト＞

○影本浩氏（東京大学大学院新領域創成科学研究科環境システム学専攻教授）

- ・実験の結果、プラスチックの摩擦、圧縮により未知のものを含む多種類の化学物質が発生することがわかった。杉並中継所付近で検出された化学物質と多くの物質が共通である。
- ・廃プラ圧縮による化学物質のリスクは未知である。安全性を確認するために、国が時間をかけて実験や調査をすべきである。

○服部美佐子氏（環境ジャーナリスト）

- ・ゴミ処理やリサイクルにかかる自治体の負担は非常に大きい。
- ・容器包装リサイクル法には改善すべき点がある。しかし、拡大生産者責任を追求するためには、この枠組みで廃プラのリサイクルを進めていくべきである。
- ・汚れたプラスチックはリサイクルに不適なので、汚れの少ないプラスチックを集める必要がある。
- ・リスク・コミュニケーションの基本は、謙虚に相手の話に耳を傾けることである。

○細見正明氏(東京農工大学工学部化学システム工学科教授)

- ・廃プラ圧縮で発生する化学物質のうち、最も毒性が強いと思われるベンゼンの発生量を試算すると、その量は自動車一台分程度である。化学物質に関連する他のリスクと比較すると微量だと考えられる。
- ・ベンゼンは活性炭吸着により排出濃度を10分の1程度にすることが可能である。

○柳沢幸雄氏(東京大学大学院新領域創成科学研究科環境システム学専攻教授)

- ・プラスチックの圧縮によって発生する化学物質は未知のものも含めて非常に多様であり、リスクを評価することができない。未知のリスクに関しては推定有罪を考えるべきである。
- ・排気の燃焼(アフターバーン)や焼却処理によって、未知の化学物質を、既知の物質(CO₂と水)に変換することができ、安全性を高めることができる。
- ・プラスチックは、用途にあわせて色々な物質を添加して作られている。このため、色々な種類のプラスチックを一緒にリサイクルしようとしても、実用に耐えるプラスチックをつくることはできない。プラスチックはリサイクルに適さない素材である。

対策部会としては、まず、この専門家のやりとりを吟味し、多摩市へのこれからの働きかけを十分に検討していきます。

<シンポジウム参加者の印象や感想>

- 参加者が過激な反対派であるかのように安井氏が誤解していると感じた。極論を持つ人ばかりでないことを理解してほしかった。
- リスク・コミュニケーションの重要性が話題になったが、多摩市にもその点を十分認識してもらいたい。
- 細見氏の説明により、ベンゼンの量は安心できるレベルのように思えたが、排出されると考えられる多種類の化学物質による複合的な健康影響については、依然として不安を覚える。
- このシンポジウムでの基調講演やパネルディスカッションを聞いて、「安心できる」と考えられた人がいるのか疑問である。
- 安井氏が近くの小学校で健康調査を行なうことの合理性を一定程度認める発言をしていたのが印象的であった。
- 化学物質のリスクは「犠牲者がでてからわかる」という柳沢氏の発言を安井氏も認めていた。人間を対象にした大掛かりな実験であるように感じられ、強い衝撃を受けた。